

| | |
|--------------|---|
| Title | 日露戦争期の英国における武士道と柔術の流行 |
| Author(s) | 橋本, 順光 |
| Citation | 阪大比較文学. 2013, 7, p. 178-198 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/27366 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日露戦争期の英国における武士道と柔術の流行¹

橋本 順光

Yorimitsu HASHIMOTO

はじめに 英国における新たな日本趣味

日露戦争時、英国は日本の戦況を自国のことのように大々的に報道した。なによりも日本の同盟国として、ロシアの南下や外債の貸し付けといった利害を共有していたからである。それだけでなく日本の善戦を褒め称え、さらには日本の効率的な文明化に学ぼうという機運まで生まれた。実際、G・K・チェスタトンが回想するように、当時のジャーナリズム界ではあからさまな日本への批判が事実上、禁じられており、日本嫌いであっても賞賛するのが慣例だったという事情は考慮しなければなるまい²。ただ、それらの賛美は日英同盟のための擬製という政治的な配慮にはとどまるものではなかった。サールがいち早く指摘したように、ポーア戦争に辛勝した帝国を「頹廢」や「退化」から救うため、さまざまな改革運動と解決策とを模索していた英国にとって、ロシアと善戦する日本は一つの手がかりと手本とを提供したのである³。英国最大の脅威であり、それだけに反面教師ともなった新興ドイツとならんで、日本は、英国の「国民＝国家の効率」化に示唆を与えるものと考えられたのだった。

たとえば、「武士道(Bushido)」や「柔術(Ju-jitsu)」といった言葉が、脚光を浴び、盛んに使われるようになったのも日露戦争以降のことである。十九世紀後半、日本を芸者や美の国として理想化するジャポニズムが流行したが、日露戦争以降の英国における日本熱もまた、日本礼賛にことよせた英国の改良運動ゆえに、第二のジャポニズムとしてとらえられるかもしれない。一九〇八年、武士道と柔術に言及しながら、日本をスパルタのような堅忍不拔の国として喧伝し、英国の若者に「最初に国のこと、それから自分のこと(“Country first, self second”）」を訴えたベーデン＝パウエルによるボーイスカウト運動などは、その典型的な一例といえよう⁴。これら柔術や武士道は、日露戦争以前から紹介があったにもかかわらず、一部をのぞいてさして人々の関心を集めなかった。したがって日露戦争を契機にして、流行と流用が生まれたといえるのだが、それでは英国のどのような土壌がそれを可能にしたのか。本稿は、エドワード朝の教育改革と国民道徳の模索に注目し、その流用の過程をみとめることにしたい。

1 日露戦争の報道 『タイムズ』紙の社説を中心に

ロシアとの戦争で日本がどれだけ好意的に英国で報道されたのか、そして日本側も外国人記者をプロパガンダとして利用しようとしたかは、お雇い外国人の医師として東京に滞在し、各国の要人に会い、多くの新聞に目を通していたベルツの日記に端的に現れている。旅順陥落の目前、一九〇四年十二月三十日に、開戦この方を振り返って、以下のように記している。

イギリスの新聞の日本礼賛は、はてしがたい。アメリカの方はもう、ずっと控え目になった。だが、日本も如才なく、アングロ・サクソンの世界で、じゃんじゃん警鐘を打鳴らすことを心得ている。雑誌類は、日本関係の記事で一杯だ。そして米・英の日本特派員は、今や全くの賓客扱いで、記事の提供をうけている⁵。



図 1

いくつかみてみることにしよう。その社説はしばしば政府を代弁するものとして知られるが、『タイムズ』の社説では日露戦争の経過はほぼ日をおかず詳細に報道され、おおむね好意的に評価されていた。たとえば開戦に際して、仁川沖でのワリヤーグとコレーツへの攻撃と沈没についてロシアはその「奇襲攻撃」を非難したが、『タイムズ』の社説は早くも一九〇四年二月十一日において、その問題は単に「アカデミックな興味を引くものでしかなく」、「現代の慣習においては、正式な宣戦布告というものは、規則というよりも例外にすぎない」と擁護した¹¹。旅順陥落についての社説では、勝算が低いにもかかわらず、難攻不落の砦を攻撃しつづけた「粘り強さ」と「壮烈な勇氣」をたたえ、日本は、西洋の文明をわずか一世代のあいだに完璧に習得したことに驚嘆させてみせている¹²。そうした精神主義の強調は、日本海海戦についての社説でいっそう明らかとなる。両艦隊が同等の戦力であったにもかかわらず、日本側の被害が少なくロシア側が全滅したのは、戦術や技術が原因なのではなく、「すみずみまで行き渡った義務と愛国の心」すなわち「武士道の産物」というのである¹³。

また、ヨーロッパ大陸を中心にしてくすぶり始めた黄禍論についても反論しており、むしろ日本の文明化をたたえることで、等しく列強として処遇すべきことを「タイムズ」の社説は幾度にもわたって訴えている。そもそも二千五百年にわたって、外国と「混血」することなく島国で生活してきた民族と、ほかの「反動的なアジア諸国」とは「同じ血」に属するとすら言い難く、日本が黄色人種を統率することはきわめて考えにくいと、ある社説は述べている¹⁴。この黄色人種とは主に中国を念頭においてのことなのだが、旅順陥落直後の社説では、その中国と日本とは、「白人」同様に「人種の相違点」や利害の不一致が多い

もつとも、外国人記者を「賓客」扱いして東京で接待するばかりで、なかなか従軍させないことにいらだつジャック・ロンドンのような記者もいたことは、ベルツ自身も記すとおりである⁶。一九〇四年三月十六日号の『パンチ』誌掲載の「東洋の知恵」と題された挿絵が巧みに示唆するように（図 1）、「検閲」と書かれた白布で従軍記者を目隠しする日本の軍人は、背後からスカーフで旅人を絞殺するインドの伝説的な暗殺集団サグを連想させ、油断のならない警戒感をうかがわせる⁷。事実、日本側の報道規制と広報活動は必ずしも功を奏したとは言い難いのだが⁸、それでもなお英国の新聞の「日本礼賛」が続いたことは確かである⁹。この引用からまもなくして旅順が陥落し、一九〇五年の一月八日、ベルツは、「イギリスの新聞のように、あんなに持ち上げたのでは、日本人の間に、危険な自惚れが頭をもたげざるを得ない。この結果を、いつかイギリスは思い知ることだろう」と不吉めいた予言を日記に書き付けている¹⁰。

そこで、ここでは『タイムズ』からの例を

ことを改めて指摘し、汎アジア主義や黄色人種による連合がいかに幻想の産物であるか強調している¹⁵。このように、こと社説に限ってみても、一貫して『タイムズ』紙は日本の文明化を強調し、その高い士気をたたえ、黄禍論のような否定的な論調に対して、日本とほかの東洋諸国との相違点を指摘して反駁を繰り返したのだった。

これはまた日本政府の公式見解、とくに広報大使として英国に派遣された末松謙澄の主張とほぼ一致している。事実、旅順が陥落してまもなく、末松がロンドンで演説した「歴史的にみた中国の膨脹」¹⁶は、その詳細が『タイムズ』で紹介されたが¹⁷、中国を、元来、平和な民族国家とみなす主張は別として、日中の差異を強調するあたりは、末松の講演の四日前に掲載された『タイムズ』の社説とも共通するところであった。このように英国の新聞が日本と同調していたことは、同じ頃、ロンドンにいた劇作家の島村抱月が『読売新聞』ほかへ書き送った記録からもうかがえる。抱月は、明治三五年春から三七年秋まで英国に留学していたのだが、日露戦争がボア戦争と同じくらい耳目を集めていて、その報道に一喜一憂すること「殆んど英国みづから戦ってでもいるようである」と感激している¹⁸。新聞では『タイムズ』を先鋒に、「殆んど凡て、及ばん限りの力を日本の弁護に尽し」、ヨーロッパ大陸の新聞が黄禍論を訴えるのに対しても「一々弁駁争議の労を吝まず」、この友誼にはしかるべく報いなければならないというのである¹⁹。

とはいえ、日本の善戦や勝利の理由を技術より、もっぱら士気にばかり求める論調が、日本よりむしろ英国で多かったのは、大きな相違点といわなければならない。ここには、物量の差からすぐに圧勝できると信じられたボア戦争での苦戦を経たところが大きい。というのも、日清戦争においては事情がまったく異なっていたからである。たとえば新渡戸稲造は『武士道』（一九〇〇）において、日清戦争に日本が勝利できたのは「レミントン銃とクルップ砲」を持っていたからにすぎないといった、とくにアメリカで顕著な技術決定論に対して、それらの武器を使いこなした「武士道」という精神の重要性を強調しなければならなかった²⁰。それに対し日露戦争に際しては、むしろ英国の方で武士道によって日本の善戦が説明されたのである。二十世紀の戦争においては、新渡戸が述べた「武士道」のように、宗教や階級に縛られない国民道徳が兵士の育成に効果があり、それをボア戦争に苦戦した英国は取り入れるべきではないのかと、国家再生の鍵として期待をもって報道されたのである。こうした風潮を示す初期の一例が、風刺画雑誌『パンチ』の一九〇四年七月六日号に掲載されている（図2）。その絵は「愛国心の勉強」と題され、着物姿の日本人女性が、旅順の地図を前に説明するのを、英国人の象徴であるジョン・ブルが神妙に聞いている様子が描かれている。その台詞には、



図2

ジョン・ブル「あなたの陸軍の組織はすばらしくうまくいっているようだけど、いったいどうやったらそんなことができるんだろうか？」

日本「それはとても単純なことです。わたしたちのところにいる男たちは、国のためならいつだって自分の身を捧げる覚悟ができています。だから現に、あんなふうに行うことができるんですよ。」

ジョン・ブル「それはうまいやりかただね。私も国で試してみることにしよう。」²¹

とあって、国のために自己犠牲を厭わない兵士たちへの関心が、やや皮肉まじりながら、うかがうことができる。この絵より数ヶ月前、二月から五月にかけての旅巡港閉塞作戦が、その失敗にもかかわらず、『タイムズ』紙などで、その広瀬武夫の死とともに好意的に大きく報道されていたので²²、そうした風潮をふまえてのことであろう。『タイムズ』紙の社説にみる精神性の強調は、こうした『パンチ』誌の疑問と連続していることがうかがえる。

一方、その旅順で決死の作戦に従事していた桜井忠温は、皮肉にもボーア戦争でのボーア人の善戦こそ、士気が物量に勝る一例だと考えていた。桜井は、そのベストセラー『肉弾』（一九〇六）で、

世界の最大強国として自負せる英人が、弾丸黒子の地に割據したるボア人と戦端を開いた時には、世界は挙りて、是れ恰も鉄槌を以て卵子を砕くが如きのみと信じいた。然るに意外にも、英軍の敗報連りに天下を驚かしたは何故か。乃ちボア人の勇敢慧敏なると、彼等の祖先以来英人に対する歴史的敵愾心と、又其スパルタ的精神教育とに基因したことは云うまでも無い²³。

と、記している。桜井忠温の『肉弾』は、宣伝もかねて翌一九〇七年に本田増次郎とアリス・ベーコンによって英訳が出版され、新渡戸の『武士道』同様に、そこから各国語訳が刊行された。自己犠牲をいとわないどころかむしろ誇りに思う「忠君愛国」ぶりは、英国にも衝撃を与えたが、当然のことながら、この一節は英訳されることはなかった。

2 柔術と武士道の流行 レピントンの「国民の魂」を中心に

ボーア戦後の英国で、桜井にならえば日本の善戦には「スパルタ的精神教育」に起因するのではないかという同時代の見立てを裏書きし、「武士道」を用いて明確に説明して、英国でその言葉を広めた最大の立役者こそが、『タイムズ』の軍事通信員チャールズ・レピントンである²⁴。たしかに一九〇四年の八月から十月にかけて、日本陸軍は宣伝と参考資料として、新渡戸の『武士道』を戦地で従軍する各国記者に配布した記録が残っており、それらの影響を看過することはできまい²⁵。裳華房から寄贈とあるので、一九〇二年に刊行された英文の『武士道評論』かと思われるが、新渡戸の『武士道』はよく読まれたものの、従軍した作家ジャック・ロンドンの例が示すように、むしろ黄禍論へと転用されたところがあった²⁶。一九〇五年に新渡戸は、『武士道』の増補改訂版を刊行するが、それが日露開戦から約一年経過した後手の作業であることが示すように、それだけ関心が高まった素地そのものは、新渡戸によるというよりも、その著作を援用したレピントンが形成したといっても過言ではない。新渡戸に依拠しつつ武士道を英国で宣伝したという点では、日本政府の意を受けたアルフレッド・ステッドや末松謙澄も講演と著作で力説したが²⁷、各種評論や記事への言及や引用といった影響力から考えると、あいにくレピントンに及ぶことはなかった。

そのレピントンの記事「国民の魂」は、前述の『パンチ』の「愛国心の勉強」から約三ヶ月後、ちょうど陸軍が従軍記者に新渡戸の『武士道』を配布していたころの一九〇四年十月四日付け『タイムズ』に掲載された。同紙で戦況を細かく報道してきたレピントンは、こうした日本兵の誇り高い勇気と国家への忠誠は、武士道に起因すると説明したのである。スパルタになぞらえながら、日本の武士道は「政治的にみれば国民道徳のシステムとして実に称賛すべき内容」であり、英国はもっと見習うべきではないかと提案したのである²⁸。後日、『タイムズ』紙には賛否両論の投書が掲載されたが、深く記事に同意した意見の方が多く、さらにミース卿が提案する投書に従って、記事はパンフレットとして再発行されることになったのである²⁹。この「国民の魂」は新渡戸について言及こそしていないものの、内容からみて『武士道』をふまえて書かれているのは明らかである。

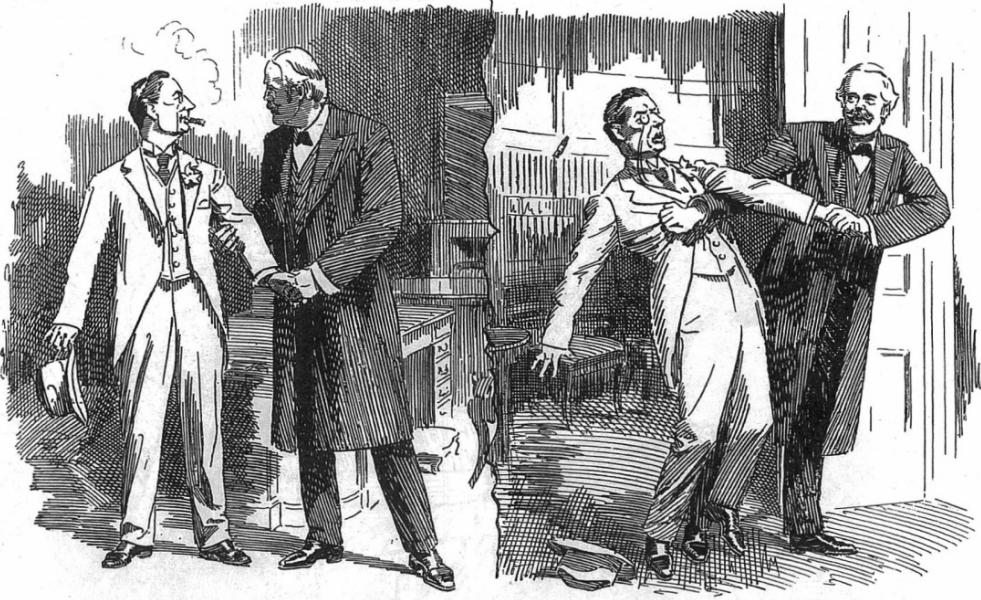
いうまでもなく、「武士道」という言葉を英語圏に広めたのは新渡戸の功績である。チェンバレンが「新宗教の発明」（一九一二）で批判したように、新渡戸の造語とまではいえないまでも、新渡戸の『武士道』刊行以降、日本の近代化と愛国心とを説明する原理として重宝されたことには変わりはない³⁰。ただレピントンの記事の重要性は、もともとアメリカに向けて書かれた『武士道』を、ボーア戦争での英国の苦戦という、衝撃がさめやらぬ当時の関心にそって要約し紹介した点にある。その結果、いわば『武士道』はより身近なものとして、より切実な問題意識とともに、英国でいわば再発見されたのである。そんなレピントンの影響はまた日本にも及んでいた。彼の連載記事は、時を置かずして『時事新報』に森晋太郎によって訳載され、それらすべてが各種情報資料として切り抜いて保管された³¹。連載終了後には、斎藤実はじめ軍人諸家の序文を多数冠してタイムズ軍事投書家稿『タイムズ日露戦争批評』（時事新報社、一九〇五年）として一書にまとめられたのだった。「国民の士気」と訳された「国民の魂」の記事は、『時事新報』掲載のころから評判となり、たとえば読売新聞ではやや「買い被りの嫌い」があるため、背に「冷汗」する読者がいないことを祈ると論評した記事があるほか、出征兵士に小冊子として頒布を願い出た例まであったという³²。こうした事例からも、日本よりもむしろ英国で、日本の善戦は武士道に起因すると報道され、その結果、日本でも忠君愛国の原理として武士道への注目がいっそう高まったことが考えられよう。

そもそも、日露戦争時の英国では、愛国心により国民国家を改良し、大英帝国の臣民として自覚を高めようという機運が高まっていた。レピントンの「国民の魂」を小冊子にするよう提案したミース卿は、ちょうど日露開戦からほどなく、ヴィクトリア女王の誕生日である五月二十四日を祝い、学校では国旗を掲揚し、国歌を斉唱すべきだという「帝国記念日(Empire Day)」運動を始めていた。日本の愛国教育と、日本兵の「自己犠牲と忠誠心」とが参照されたことはいうまでもない³³。辛くも勝利したボーア戦争についていえば、終戦の翌年一九〇三年五月には、戦争に志願した一万一千人のうち、八千人が兵士として不合格になったことが報じられ、この事実は英国人が「人種的退化」に陥っている例として、その後も衝撃のみ一人歩きして繰り返し言及されることになる³⁴。一九〇四年には、「身体的劣化」についての合同委員会報告書が提出され、「人種的退化」自体は否定されるのだが、未成年の喫煙や飲酒を規制し、ドイツやスウェーデンの制度を参考に、身体を訓練する必要性が改めて強調されることとなった³⁵。

柔術もまた、こうした外国の身体文化への関心が高まりのなかで、日露戦争とあいまって注目されたのである。すでに一九〇〇年に、谷幸雄が自分よりも重く大きな男をねじ伏せる柔術によって、ミュージック・ホールのような娯楽の場で人気を呼んでいた³⁶。それが、前述の島村抱月によれば、「時節柄ではあり、日本の柔術というものは疾くから西洋人間に評判のものであるため、何れの新聞もこのたびの戦争に因みをもたせて盛んに書き立てた」と、「柔術家の谷君」が見世物だけではなく言論の場でも話題になったことを記している³⁷。小国のボーアに苦戦した英国が、日本がロシアに善戦するなかで国民効率化の鍵

として柔術に注目し、武士道はその説明原理として見いだされたのである³⁸。実際、その谷による模範演技の写真が満載された『柔術』という書物の序文では、柔術を武士道によって説明しながら、レピントンの「国民の魂」を引用している³⁹。複数の日本人が英国で柔術や柔道を教え、流行に棹したことは興味深い現象ではあり、彼等の功績もさることながら、こうした同時代英国の文脈は見逃すことはできないだろう。

その点で示唆に富むのは、パンチの一九〇五年五月二四日号掲載の図3「財政の柔術」である⁴⁰。財政問題で対立するジョセフ・チェンバレンに対し、握手して受け入れると見せかけて、組み伏せるアーサー・バルフォア首相を二枚の続き絵で描き、いわば寝技の政治を風刺した一枚である。ただ正確には柔術ではなく、おそらく『ピアソンズ・マガジン』一八九九年四月号に掲載されたバーティツの図解(図4)を参考にしたものだろう⁴¹。逆版になっているのは、おそらく挿絵画家のサンボーンが線をトレースしたからだと思われる⁴²。そしてこのバーティツとは、その名が示すように、バートン=ライトが、和服



FISCAL JIU-JITSU.

FIRST MOVEMENT.—The Friendly Approach.
ONCE YOU CAN PERSUADE A MAN TO TAKE YOUR HAND, AND LET YOU SLIP YOUR ARM UNDER HIS (FIG. 1)—

SECOND MOVEMENT.—The Chuck-out.
IT IS QUITE EASY, BY A LITTLE ABOUT LEVERAGE, TO REMOVE HIM FROM THE PREMISES (FIG. 2).



左 図3 上 図4

を前提にした柔術を洋服の英国人の護身術へと作り替えたバートン流柔術の意味である⁴³。武士道の流布にレピントンが大きな役割を果たしたように、柔術においても、英国の土壤に根付くよう仕立て直した媒介者の存在が大きかったことを示す一例といえるだろう。

このように広範な影響が示すように、レピントンは「国民の魂」で、先のボーア戦争での苦戦の記憶と、現在進行中の日露戦争の報道を巧みに組み合わせた。小国のボーアに苦戦してしまうほど、まともな「宗教戦争」や「愛国」戦争ができなくなってしまった英国と、「広瀬中佐の精神」とを対比したのである。そして、そうした名誉と勇気を尊ぶ武士道が、スパルタのように過去から連綿と続いている例として、鎌倉権五郎景正 (Gongoro) の故事に言及している。権五郎は眼に矢が刺さったまま奮闘したが、あとでその矢を自分の顔に足をかけて引き抜いた男を、武士の顔を足蹴にしたとして責めたと紹介しており、それだけ武士は名誉を重んじるため、場合によっては「切腹 (harakiri)」を厭わないことを強調したのである。レピントンは柔術にこそ言及していないものの、こうした歴史的な故事の恣意的な援用は、ボーア戦争後の英国で、主にドイツを参考にしながら、初等教育で体育と歴史の必修化にふみきったことと関係づ

けることができる。このとき、本来、一部の上層階級がたしなむスポーツと歴史が、国民全体を規律し、統合する科目へと大きく変化したのである。従って軍事目的に沿って体育が導入されたように、歴史もまた国民としての一体感と愛国心を育成することが期待された。たとえば、前年の改正教育令に基づいて一九〇五年に作成された『教師手引書』では、複雑な史実よりも「偉人の偉業」に重きをおくことが指示されている⁴⁴。新渡戸の『武士道』では、やや不正確な歴史的挿話や故事が史実と創作を混同したまま参照され、過去との連続性も恣意的に強調されており、その点についてはすでに発表当時から批判があった⁴⁵。「国民の魂」でも同じ傾向がみられるが、そうした国民の歴史と尚武の強調は、むしろ英国の教育改革が目指すものと多く共通していたのである。

第二の点は、宗教問題にふれずに国民道徳を涵養することが武士道には可能ではないか、と指摘したことである。もはや「宗教戦争によって燃え上がるような息吹を感じるものが皆無」な英国にとって、「宗教ではなく哲学である」武士道は、キリスト教の各宗派の争いや違いの問題を超えて、「規律と団結を促進し、個人を国家に埋没させる」ことができるのではないかと述べたのだった。英国の場合、「騎士道(chivalry)」では階級の壁を乗り越えられないが、本来、「侍(samurai)」のものだったにもかかわらず国民道徳へと浸透していった「武士道」ならば、宗派や階級の対立を超えて、国民を一致団結させることができるのではないかというのである。こうした関心は、同時代の英国において、宗教教育と道徳教育との関係をどのようにすべきか、激しく論争が繰り広げられていたことと切り離すことはできない。一九〇四年の改正教育令で、宗教教育とは無関係の道徳教育が初等教育に導入され、「子どもたちに勤勉、自律、そして困難な状況に直面したときのための勇気ある忍耐を養い、高貴なものに対する崇拜、いつでも自己を犠牲にする覚悟、純潔と真実を求めて努力することを教える」よう求められたからである⁴⁶。新渡戸は、『武士道』の序文で、宗教教育のない日本で道徳教育はいったい可能なのかと、否定的に質問されたことが執筆の動機となったと記しているが⁴⁷、日露戦争のころの英国では、まさに宗教教育とは別個の道徳教育が模索されていたのである。

このようにボーア戦争後の英国では、宗派間の相違を超えるような愛国心や自己犠牲の精神の涵養が試みられており、レピントンの「国民の魂」は当時の風潮に寄り添う形で、武士道が一つの手本になることを示唆したといえる。それだけでなく、日露戦争中にレピントンは、膨大な通信記事を『タイムズ』紙に掲載したが、そのなかで精神力の重要性を幾度となく強調している。一例を挙げると、レピントンによれば、奉天の会戦の勝利は、日本の「いかなる犠牲も厭わない」「団結」によって、つまり、この「道徳の力(moral forces)」こそが「物量力(material strength)」を「二倍、三倍にした」ためにもたらされたとしている⁴⁸。レピントンの通信記事は、「国民の魂」を含めて、『極東での戦争』という七百頁近い書物として一九〇五年に刊行されたが、そのなかでも、こうした「道徳の力」は繰り返し力説されている。前述したように、『タイムズ』の社説は、日本海海戦の勝利を「武士道の産物」としたが、その際に、東郷平八郎の信号旗は「ネルソン提督のものとはほとんど同一」だったと記してもいる⁴⁹。東郷が、日本海海戦を百年前のトラファルガー海戦に重ね、ネルソンが「イングランドは各人が義務を全うすることを期待している」という一節を念頭において、「興国の荒廃此の一戦にあり、各員一層奮励努力せよ」と信号を送ったとは、すでに当時からよく言われてきた。これまで見てきたように当時の英国は「各人が義務を全うする」体制を模索しており、それゆえ東郷の信号旗は、彼が望んだ以上にネルソンと重ねられ、英国民への呼びかけのように翻訳されたことは無理からぬことであつたと思われる。

3 武士道の流行と同時代の風刺

こうした英国の武士道熱を、外交辞令も含め、もっともはっきりと示す例が、リーズデール卿こと、A・B・ミットフォードによる『日本へのガーター使節団』(一九〇六)である⁵⁰。日露戦争での「業績」から、明治天皇は英国最高の勲章であるガーター勲章を授与されることになったが、明治天皇が渡英できないため、コンノート公爵家のアーサー王子を団長とする使節団が組織された。使節団は、一九〇六年一月にロンドンを出発し、二月に横浜港に到着し、明治天皇のほかにも、大山巖や東郷平八郎にはメリット勲章を授与するなど、高官たちに勲章がばらまかれることになった。このメリット勲章は一九〇二年に国王エドワード七世が創設した特別の勲章で、ボア戦争の英雄フレデリック・ロバーツなど陸海軍の大御所が受賞してきたが、大山や東郷はこの「名誉勲位」を受けた最初の外国人であった⁵¹。『日本へのガーター使節団』は、そのときの様子を日誌形式で記録した報告書である。

ミットフォードは、一八六六年から一八七〇年まで、英国公使館の書記官として日本に滞在したことがあり、その滞在を生かして書かれた『古い日本の物語』(一八七一)は、忠臣蔵の物語を紹介するなど、西欧世界に日本事情を周知させる代表的な書物となった。とりわけ、神戸事件によって滝善三郎が切腹する様子を詳細に記録した一文は英語世界に「ハラキリ」を定着させたほどに名高く、たとえば新渡戸は『武士道』で切腹を説明する際に、簡にして要を得ているためとして、ミットフォードの記述をそのまま掲載している⁵²。そのミットフォードが、この『日本へのガーター使節団』で日本の「武士道」を幾度となく褒めそやし、これこそがいまの日本を築いたと記しているのは、驚くに当たらないだろう。武士道では「死ぬことこそが重要な点」であり、日本の女性は息子たちが国のために身を捧げることを厭わないと賞賛し⁵³、それだからこそ日本には国のために身をなげうつ無数の「広瀬」がいるというのである⁵⁴。少年少女の糸乱れぬ行進については、先のロバーツ陸軍元帥がみたら喜びそうだと特記し、女性による柔術の演技に感心しているだけでなく、江田島の海軍兵学校で柔術を体育として賞賛しているのも⁵⁵、一九〇四年に「身体的劣化」についての報告書を提出する合同委員会で、英国の初等教育で体育と軍事教練との関係をどうすべきか、各国の例をひきながら、かまびすしく議論されていたことを念頭においてのことだろう⁵⁶。徴兵制度についても、「近年、階級間の格差を撤廃したこと」によって、「侍」のみが兵士になった旧時代と異なり、優秀な将校や将軍が生まれたことを注記している⁵⁷。これもまた、レピントンと同じく、「武士道」が本来、武士階級のものだったにもかかわらず、兵士全体に共有されていることへの関心に根ざしている。

これはもちろん、日本で読まれることを意図しての外交辞令ということでもある。実際、ミットフォード個人は、「古い日本」にこそ愛着はあっても、新しい日本については、むしろ警戒と失望を感じていた。たとえばわずか六年前、一九〇〇年の義和団事件に際しては、日本政府が西欧列強と足並みを揃えることに好意的な『タイムズ』紙に反論して、義和団事件を契機にして、日本が反ヨーロッパのアジア同盟を構築する可能性を挙げ、警告の投書を掲載していた。ほんの二、三十年前の日本では義和団と同じような「狂信的」攘夷が多くみられたことを忘れるべきではなく、「侍」という言葉こそ消え去っても、「古い日本の精神である大和魂」はまだ死ぬことなく、その「攻撃的な」国民性とあいまって、いつ火山のように爆発するか知れたものではないと、警告したのである。この投書の影響は大きく、フランスでは黄禍論を引き起こす契機となり、日本の外務省も問題視するところとなった⁵⁸。つまり、三国干渉を賢明な措置として言及し、中国と日本の連合の危険性を訴え、「満州」が日本の支配下におかれぬようロシアに期待すべきと述べていたミットフォードが、日本へのガーター使節団随行を命ぜられたことになる⁵⁹。従って、これはあえてガーター勲章と共に送りこみ、日本賛美の報告書を書かせることで、日本政府に対する警戒

心を解いて懐柔しようとした行為といえるかもしれない。ただミットフォード自身はといえば、一九一四年の著作『日本の遺産』では、再び、日本が中国とアジア連合を率いる危険性について激しい筆致で記しており、持論を変えた様子はない⁶⁰。いずれにせよ、ミットフォードの事例は単なる歴史の皮肉というよりも、日本や武士道への高い評価が、英国国内の事情と密接に連動しており、武士道の評価はその脅威とも表裏一体であったことを示す端的な例といえよう。

実際、英国の日本礼賛は、列強のなかでも特有のものであった。冒頭で引用したベルツが記すように、アメリカには冷ややかな意見も多数見られたからである。例えばニューヨーク・タイムズ紙は、ロンドン・タイムズの「国民の魂」が持ち上げる「武士道(bushido [sic])」は、しょせん「日本を危険にする狂信主義」にすぎず、日本が体現しているのは、「近代西洋文明の理念」にほかならないと、醒めた批判をしている⁶¹。例外的ながら、英国でも似たような批判があった。日露戦争時、日本批判は事実上不可能だったと回想したG・K・チェスタトン⁶²は、同じ趣旨の指摘をやんわりと、しかし、特異な逆説と警句を好んだ保守派文人らしい筆致で記している。一九〇六年八月二五日号の『絵入りロンドン新聞』に寄せた一文で、彼は、日露戦争後の柔術の流行をこんなふうに風刺している。

日本の勝利を、日本人は大いに誇るべきだ。しかし、それは日本の方法や、いわんや日本文明にとっては誇るべきことでもなんでもない。今回の勝利は、あくまでヨーロッパの模倣によってもたらされたのであって、ヨーロッパをまねなければ勝つことはありえなかったからだ。日本の格闘技とか、何か日本的なもので日本が勝ったわけではないのである。黒木とクロボトキン⁶³は、両国軍が見守るなかで、柔術の試合などしたわけではない。日本の勝利は、日本の連中が柔術を知っていたのに、ロシア人は知らなかったからというわけでもない。日本の貴族は刀が二本差しなのに、ロシア人は一本差しだからといって、何の関係もないのと同じことだ。なのに、勝利のあとには、いつもこうしたファッションばかり流行する。勝った者の衣装、哲学、壁紙が模倣されるのだ⁶²。

実際、当時の英国ではキモノが流行しており⁶³、マダム・タッソーの蝋人形館では東郷や乃木の蝋人形が並んでいた⁶⁴。こうしたキモノや武士道、柔術の流行を、チェスタトンは日露戦争での勝利が理由と考えたのだ⁶⁵。たしかに、柔術や「哲学」が流行したのは、十九世紀のジャポニズムではほとんど見られなかった現象であり、チェスタトンが苦々しく指摘するのも無理はなかったといえる。

一方、柔術については、ついにロンドン警視庁で教えられるに及び、自身も日本へ行ったことのあるE・T・リードが、一九〇五年九月六日号の『パンチ』で、いっそ服装も日本風にしたらどうだろうと、十九世紀の皮相なジャポニズムとの連続性を指摘するように風刺している(図5)⁶⁶。チェスタトン自身は、柔術とは「普通のレスリングにファウル・プレイを加味したもの」と甚だしい誤解をしているのであるが、両者の軽妙な批判から、「日本の方法」が表面的に流行した土壌は共通のものであることが推測できよう。ほかにも作家のH・G・ウェルズによる『モダン・ユートピア』(一九〇五)で、ノブレス・オブリージュを担う未来の特権階級が「サムライ」と名付けられているのもその現れである⁶⁷。これは階級を横断する国民道徳として武士道に注目したレピントンらとは異なる受容だが、そんな表面的な「流行」の事例は、他にも「武士道」と名付けられた競走馬がいるなど、枚挙にいとまがない⁶⁸。

このように「レピントン銃とクルップ砲」で勝利したとささやかれ、新渡戸が『武士道』で弁護しなければならなかった日清戦争とは違って、英国では日露戦争に際し、あたかも武士道や柔術といった「哲学」によって勝利したかのように、その精神的側面が強調されたのであった。そしてそれを裏書きするように、英米へ広報大使として派遣された末松と金子とは、愛国教育の必要性和効果を強調している。末松

は、一九〇五年二月、金子は一九〇五年四月、それぞれ教育勅語を紹介し、日露戦争において道德教育が重要な役割を果たしたことを主張したのだった⁶⁹。



“BANZAI!!”
A SUGGESTION WAS RECENTLY REFERRED TO IN MR. PUNCH'S "CHARIVARIA" THAT MEMBERS OF THE POLICE FORCE BECOMING PROFICIENT IN JIU-JITSU SHOULD FORTHWITH BE PERMITTED TO ADAPT SOMETHING NEAT IN THE WAY OF JAPANESE COSTUME. OUR ARTIST IS DISTINCTLY OF OPINION THAT THERE ARE POSSIBILITIES IN THE IDEA.

図 5

一方、東京で主教をつとめていたウィリアム・オードリーは、そうした風潮の一端を担った『タイムズ』紙に、日本の過大評価は日英双方にとって幻滅をもたらすことになるという手紙を投書している⁷⁰。しかし、オードリーが宗教者であることが示唆するように、こうした意見は少数派であった。ポア戦争後の英国では、加速した世俗化と産業化のなかで、階級や宗派の差異を超えた国民道徳ないし国民兵の育成を模索しており、非キリスト教国家の日本はその格好のモデルと考えられたのである。

4 教科書としての日本 ヴィヴィアン・グレイの『大英帝国衰亡史』（一九〇五）について

こうした武士道の称揚にみられるように、日本の事例を引き合いにだして英国の現状に警鐘を鳴らす風潮を体現するパンフレットが、一九〇五年に出版された。翌年に出された改訂第二版の巻頭と末尾には、二十五にも及ぶ各紙書評からの抜粋が並び、その表紙にある惹句を信じるなら、初版は一万六千部を売り上げたという。これがヴィヴィアン・グレイによる『大英帝国衰亡史』である⁷¹。グレイという名は、ベンジャミン・ディズレーリが書いた最初の小説『ヴィヴィアン・グレイ』（一八二六）にちなむ。それが野心的で弁舌巧みな青年の立身出世を半自伝風に描いた小説であり、その作者が、十九世紀後半に、帝国主義を積極的に推し進める宰相になったことを考えれば、大望あふれる若い弁論の徒といった意味だろうか。ほかにもいくつかのパンフレットを同じ筆名で刊行しているが、本名はエリオット・エヴァンズ・ミルズということと、オックスフォードで歴史を学んだということのほか、詳細は不明である。

とはいえ、この『大英帝国衰亡史』は、エドワード朝の英国、特にトーリー党が抱いた懸念を見事に要約した資料として、ハインズが言及して以来⁷²、英国史研究ではつとに注目されてきた。また、題名がギ

ボンの『ローマ帝国衰亡史』をふまえているように、エドワード朝においては大英帝国がしばしばローマ帝国と重ねられたが、その典型的な一例としてもよく知られている⁷³。その影響という点では、ベーデン＝パウエルが、「もし諸君が6ペンスを愛国心のために惜しみなく使いたいと思うなら、明日の朝一番に『大英帝国衰亡史』というパンフレットを買い求めなさい」⁷⁴と演説したように、彼の『スカウティング・フォア・ボーイズ』（一九〇八）から始まるボーイスカウト運動と密接な関係があることも有名である⁷⁵。

にもかかわらず、この『大英帝国衰亡史』が、出版当時から百年後の二〇〇五年に、日本で教科書として使われているという設定で書かれていることについては、ほとんど触れられることはなかった。筆名にヴィヴィアン・グレイとはあるものの、『大英帝国衰亡史』は、二〇〇五年の東京で、とある歴史家が国民学校用に記した歴史書を英訳したという見立てで書かれているのである。たしかに、大英帝国がローマ帝国と同じ要因で衰退しつつあることを指摘するのが主眼であるから、日本という設定はあくまで、その設定でしかないともいえよう⁷⁶。しかし、いわば他山の石として歴史を用いて、英国が滅び去ったいま、帝国を維持していく「責務は日本にかかっているのである」⁷⁷と、若い男女に呼びかける国民学校の教科書という形式は、前述したエドワード朝における歴史の必修化と無視できまい。

大英帝国が崩壊し、「インドはロシアに、南アフリカはドイツに、エジプトはサルタンの手落ちる一方で、カナダはアメリカという鷲の翼の下へ避難し、オーストラリアはミカドの保護領となってしまった」⁷⁸未来、帝国衰亡の理由が、以下のように各節で列挙される。

- 1 都会が田園の生活を圧倒し、英国人の健康と信仰とに破滅的な影響を及ぼしたこと
- 2 二〇世紀のあいだに、英国人が保養地として以外は海を見捨てるようになったこと
- 3 脆弱と贅沢が進んだこと
- 4 文学と演劇の趣味が墮落したこと
- 5 英国人の体格と健康が徐々に劣化したこと
- 6 英国人の間で知的な活力と宗教的な生活とが衰微したこと
- 7 国民への課税が増大し、地方自治体がそれを浪費したこと
- 8 教育制度の欠陥が英国中に横行したこと
- 9 英国人が自国とその帝国とを防衛することができなくなったこと

このうち第八節の教育の機能不全については、一九〇六年の第二版で増補されたものであるが、見出しにその内容が要約されていることがうかがえよう。時事的な話題についても、たとえば第五節で、前述した一九〇四年の「身体的劣化」についての合同委員会報告書が言及されるなど、ローマ帝国衰亡史の見立てを巧みに盛り込んだパンフレットとなっている。こうしてローマ帝国の轍を踏まぬよう、教育を改善し、軍を整備し、若者に部分的な兵役を実施する必要を訴えるのである。

そもそもローマ帝国の衰退の理由が盛んに論じられ、それが大英帝国と重ねられるようになったのは、エドワード朝になってからのことだった。その先鞭をつけたのは、サミュエル・ディルの『西ローマ帝国の最後の一世紀におけるローマ社会』（一八九八）といわれており⁷⁹、『大英帝国衰亡史』でも七節の注一でしかるべく言及がある。本稿との関連で重要なのは、このディルの書物が、新渡戸稲造の『武士道』でも言及されていることだろう。ローマ帝国滅亡の一因は貴族が商業に従事するようになったためというディルの説を、新渡戸は武士が商業を嫌悪したことと対比しているのである⁸⁰。ここで思い起こされるのは、新渡戸自身は武士道を説明する際にギリシアになぞらえることはほとんどなく、むしろ「ウルトラ・スパルタ」という形容詞を否定的に用いていることである⁸¹。それにもかかわらず、「国民の魂」のレピ

ントンを筆頭に、日本やその武士道を賞賛する際に英国では「スパルタ」が肯定的に頻用された。日露戦争時における日本の評価は、いわば奢侈と退廃のローマと質実剛健のスパルタという図式が、知らず知らずのうちに前提となっていたのである⁸²。

そうした「スパルタ的精神教育」については、「彼ら[英国人]は如何に死すべきかを、われわれ[日本]に学ばねばならなかった」という一文がある⁸³。これが同時代の英国においてしばしば見られた、国のためには殉死を厭わない日本兵への驚嘆と切望をあらわしていることは明白だろう。これは、『大英帝国衰亡史』で部分的な兵役を主張し、健全な市民と健全な兵士とを同一視している点と関連している。当時、兵役については、陸軍のロバーツがその導入を熱心に説くなど、激しい論争が繰り広げられており、前述したように、ミットフォードが整然と行進する男女の若者を日本で眼にしてロバーツが喜びそうだと記しているのは、そんな彼の徴兵制導入論を指してのことであった。このパンフレットを書いたヴィヴィアン・グレイことミルズは、第九節でロバーツの改革案を肯定的に言及しているだけでなく、彼の演説集を編集しており、兵役導入も執筆の動機であったと考えられる。そして当時の兵役導入論者は、容易に予想がつくように、日本を習うべき例として言及することが多かった。実際、「国民の魂」を書いたレピントンもまた、徴兵賛成論者の一人にほかならない⁸⁴。

しかし、模範はまた脅威でもあった。『大英帝国衰亡史』の冒頭で、同盟国英国の危機に際して、はるか「極西」まで艦隊を派遣できなかった「日本」の無念が触れられながらも、「オーストラリアがミカドの保護領となった」ことが語られるのはその一例である。これはつまり、日本は同盟国としては遠くにあるにすぎず頼りにならないこと、しかし、その急成長は、将来、なんらかのかたちで大英帝国の脅威になる可能性があるということが示されているのである。その点で興味深いのは、九節の注十四で、英国の平和はアメリカを含むアングロ・サクソンの連携によって可能になるという一節である。このことは、早くも日露戦争直後の段階で、日英同盟はロシアの勢力を削ぐための過渡的な同盟であり、日本は将来的に大英帝国の脅威となりうる存在であるため、最終的に必要なのはアメリカとの同盟であると、著者がみなしていたことを示している。

5 模範と脅威 ベーデン＝パウエルの『スカウティング・フォア・ボーイズ』における日本

このように『大英帝国衰亡史』では、ローマ帝国という過去、そして日本という同時代の帝国が、巧みに大英帝国再生のプロパガンダとして組み合わされている。そして、模範と同時に脅威でもある日本という存在は、『大英帝国衰亡史』の主張に同意し、何をおいても購入することを勧めたベーデン＝パウエルの著作とも連続している。ベーデン＝パウエルは、その著作『スカウティング・フォア・ボーイズ』（一九〇八）から始まるボーイスカウト運動の創始者として名高いが、そこでは日本が習うべき良い例として、ローマ帝国が避けるべき悪い例として、それぞれ言及されているのである。

ベーデン＝パウエルが、公の場で日本に言及したのは、一九〇四年の十一月での講演のことといわれるが⁸⁵、その内容は翌月の「イートン・クロニクル」に掲載されている。そこで、ベーデン＝パウエルは目下、進行中の日露戦争に触れ、強国に囲まれた島国という共通点をもつ日本に英国は見習うべきではないかと述べている。

日本の成功した原因を考えてみるに、そのほとんどは日本人全体にある軍人精神と自己を犠牲にする愛国心とにもとめられるだろう。（中略）

どのようにして日本の連中はそんな愛国心を抱くようになったのか。

アップークラスの少年が、父祖である侍（つまり、日本の騎士）の騎士道を学び、大きくなればそれを実践し、さらにはミドルクラスやワーキングクラスに教えたからである。つまり、彼らは子どものときに始めているのだ。

われわれのイングランドにも、中世の騎士のなかに振り返るべきすばらしい先祖がいる。しかし、わたしたちは、彼らのまねをすべきなのに、そうしていない。

もし子どものときに、先祖の愛国心を学び、その名誉と自己犠牲という理想を実践に移し、武器の扱いを修練すれば、そうしてから同じことをこの国にいるすべての若者に教えるならば、われわれも日本の連中と同じくらい、どんな外国の侵略にも負けない強国になるにちがいない⁸⁶。

これは、『タイムズ』紙にみられるような、当時の英国の典型的な日露戦争観であるといつてよいだろう。事実、その素地を形成したレピントンの「国民の魂」は、ベーデン＝パウエル講演の約一ヶ月前、十月四日に掲載されている。「国民の魂」でレピントンが強調したように、ベーデン＝パウエルもまた、騎士階級にとどまらずアップークラスからワーキングクラスまで国民全体に浸透した道德、具体的には自己犠牲の精神、に注目している。島国という共通点についても、レピントンは、

今日、日本が実行していることは、島国の帝国にとって理想的かつ模範的な戦略であり、この戦略をもっと学ばば、わがブリテンの王冠の下にある広大な領土で戦争を防止することも期待できよう⁸⁷。

と述べており、ベーデン＝パウエルとの連続性がうかがえる。こうした日本理解は、以下の引用のように、『スカウティング・フォア・ボーイズ』でも踏襲されている。

ボーイスカウト組織の目的の一つは、かつて我が人種の道德におおきな影響を及ぼしていた騎士道を、現代の英国に復活できないかということである。ちょうど古代の「侍」という騎士たちの武士道が、いまなお日本を支配しているように、騎士道を蘇らせようというわけである。残念ながら、騎士道はあらかた滅びようとしている。一方で、日本の武士道は今でも子供に教え込まれており、日常生活のなかで実践される存在なのである⁸⁸。

こうしてベーデン＝パウエルは、日露戦争から二つの逸話をとりあげている。一つは、「親切」の見出しで、旅順において、ロシア兵が日本の塹壕に母宛の手紙を金品とともに投げ入れたところ、日本兵はそれを開封せずに、上官に報告し、上官が電報でその内容を母親に伝えたというものである。また「勇気」の項目では、ロシア軍の砦を爆破する際に、その爆弾を押さえて発火しなければならなかったため兵士が自爆したという話を紹介している⁸⁹。この二つの挿話は出典が不明だが、後者については、一七〇六年のトリノの戦いで、地下トンネルで爆死してフランス軍に抗戦したピエトロ・ミカの逸話と酷似しているので、広瀬あたりの逸話と混同したのかもしれない⁹⁰。

武士道を示す逸話としては、『スカウティング・フォア・ボーイズ』以外でも、ベーデン＝パウエルは鎌倉権五郎景正（ただし、“Gorgorro”と誤記されている）の故事を挙げている⁹¹。そのとき、レピントンの「国民の魂」と同様に、権五郎は矢を抜かれたあと、武士の顔を足蹴にしたと責めたと記しているので、レピントンが参照されたのかもしれない。たとえ直接ではないにしても、武士と日本兵とを連続してとらえる見方はレピントン以降、多く見られたので、こうした同時代の英国の新聞報道などから書き留めたの

だろう。

一方、スパルタとは対照的に、大英帝国の反面教師として参照されるのがローマ帝国である。一九〇七年の五月、ベーデン＝パウエルはボースカウトの素案の一つを書いているが、その冒頭で、「偉大なローマ帝国の衰退をもたらしたのと同じ要因が、今日のグレート・ブリテンでも作用し始めている」というジョージ・ウィンダムの一節を引用し⁹²、その引用をそのまま『スカウティング・フォア・ボーイズ』でも繰り返している⁹³。そして『大英帝国衰亡史』と同じ論法で、大英帝国がローマ帝国のように若者の退化によって崩壊することを食い止めるため、以下のように過去の歴史と父祖とを召喚している。

わが帝国の運命は、君たちのような若い世代の英国人[Britons]にかかっている。君たちは大きくなって、この帝国を支える男にならなければならない。まちがっても、かつてのローマの若者のように、愛国心もなく無気力なまま、しかるべき責任も果たさず、ぐずぐずしているうちに父祖の築いた帝国を失ってしまうような、あんな恥ずかしいまねをしてはならない。

君たちの父祖は、身を粉にして働き、苦しい戦いに耐え、そして激しく戦って死んだ。この帝国は、そうやって君たちのために築き上げられたのである。天上の先祖に顔向けできないようなことはしてはならない。帝国のためになんの働きもせず、ただポケットに手を突っ込んでぶらつくばかりという姿を先祖に見せるべきではない⁹⁴。

上記の一節は、レピントンが「国民の魂」で主張し、一九〇五年の教育改革で呼びかけられた歴史を国民のものとして実感させる修辞の一つの完成形とみなすことができるだろう。

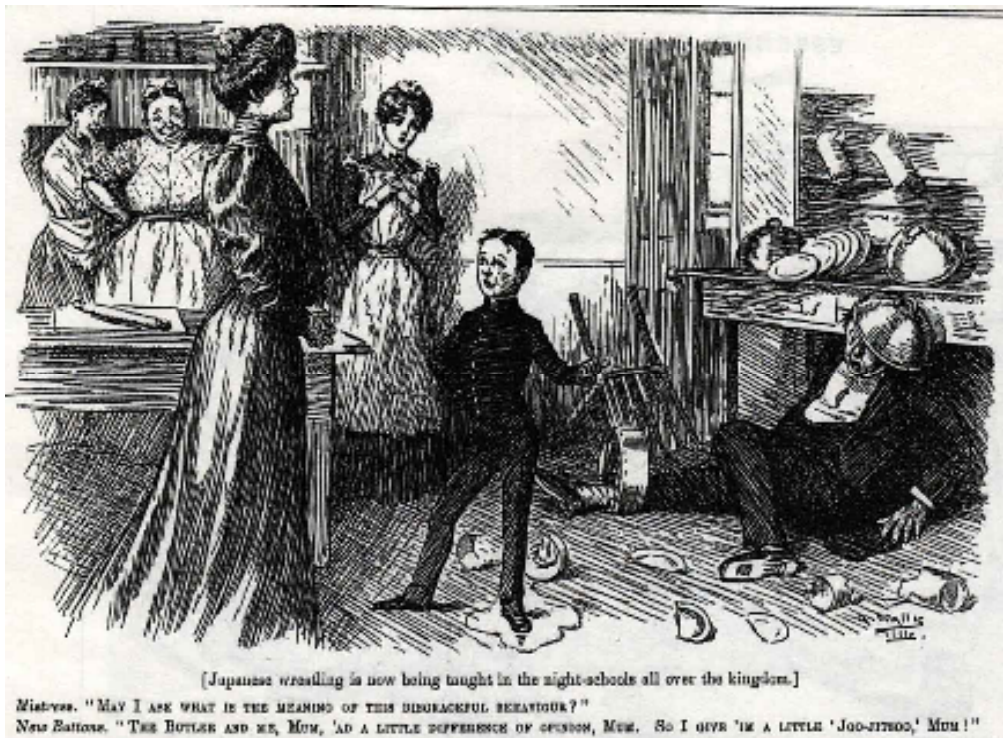


図 6



ONE MAN ONE SUFFRAGETTE. A SUGGESTION TO THE HOUSE OF COMMONS' POLICE.
Why not supply Dummy Suffragettes (artificial P-nk-h-rsts, stuffed B-l-l-ngt-n-s) with which each constable might rehearse in his spare time, and so keep himself in training for the peculiar form of Jiu-Jitsu required to meet the periodic incursions of the Real Thing?

図 7

そして国民国家だけでなく、国民の身体を規律する範例としても日本は言及されることになる。大英帝国の衰退に歯止めをかけるため、日本の禁煙法が学ぶべき例として言及され、健康法として柔術が推奨されるのである⁹⁵。こうしたロウアーミドルクラスとワーキングクラスを効率的に「改良」しようとする試みは当然のことながら、諸刃の剣となりうる。ベーデン＝パウエルが柔術に興味をもち、それをボーイスカウト運動に取り入れようとしたのは、上西貞一の模範演技を見てからと考えられるのだが、上西はまた当時盛んだった婦人参政権運動の女性たちに柔術を教えた第一人者でもあった⁹⁶。そして『パンチ』ではウォーリス・ミルズが、こうしたロウアーミドルクラスの少年たちに柔術を教えることで、規律が徹底されると同時に反抗の一因となる懸念を、いちはやく一九〇五年の十二月六日号で描いている（図 6）。見習いの召使いが執事を柔術で投げ飛ばしてしまい、それを「意見の相違」ゆえとうそぶく少年の姿がそれである。ほかにもベーデン＝パウエルが『スカウティング・フォア・ボーイズ』の草稿を仕上げるよりもまえ、一九〇七年の三月十三日号の『パンチ』には、柔術を身につけたパンカーストたち婦人参政権運動家が議院を妨害しないよう、人形で練習をしておいてはどうだろうかという、E・T・リードの挿絵が掲載されている（図 7）。もちろんこれらは戯れ言として描かれた漫画だが、ベーデン＝パウエルが柔術や武士道によって強化しようとした父権的な階層秩序が、まさにその柔術によって亀裂が入りかねないことを示唆しているといえるだろう。

事実、柔術が諸刃の剣であったように、武士道が褒め称えられる日本もまた、両義的な存在であった。『大英帝国衰亡史』と同様に、『スカウティング・フォア・ボーイズ』でも、模範とされた日本は同時に潜在的な脅威として描かれている。英国の陸軍や海軍を縮小しようとする「政治屋」議員を批判して、ベーデン＝パウエルは以下のように警告する。

彼らをこのまま、好き勝手にさせておいたら、将来、われわれはドイツ語か日本語を勉強することになりそうだ。というのも、私たちは彼らに征服されてしまうかもしれないからである⁹⁷。

深刻な脅威を及ぼしていた新興国ドイツに比べれば、日本の脅威は潜在的でかつ距離も離れていたため

に、改革の対象として参照しやすかったことが考えられる。遠交近攻よろしく、友としての敵のように機能したともいえるかもしれない。それだけに、『大英帝国衰亡史』でも『スカウティング・フォア・ボーイズ』でも、日本の脅威は筆をすべらせるようにして書き込まれている。ベーデン＝パウエルは、『タイムズ』紙で展開したレピントンの路線に沿って、日本の武士道に対して階級を横断する国民全体の道德という点で注目した。そして同時代の身体訓練への関心の延長から、柔術にも言及している。愛国教育が目的である以上、日本の手法が範例として言及されても、それは同時に油断ならない敵となりうるとして警告するのは当然のことといえるかもしれない。

おわりに

以上のように、英国では、日英同盟という政治経済的な利害のみならず、ボーア戦争後の国民国家の変革運動のなかで、一つのモデルとして日露戦争における日本の善戦が報道された。その際に精神的な側面が強調されたのは、ボーア戦争において小国に苦戦させられた苦い記憶ゆえのことであった。『タイムズ』紙は、その社説においてほぼ一貫して同盟国日本の立場を擁護し、日露戦争を人種的・宗教的対立としてとらえようとする黄禍論に対しては、日本政府の主張と同様に、日本の文明化を強調した。ただ、その社説において、日本の優勢を技術や物量だけではなく、その古層にある道德心や滅私奉公の精神にしばしば帰したのは、日英同盟の利害からだけではなかった。そこには英国の事情が大いに関係していた。日露開戦の一九〇四年は、「人種の劣化」に関して合同委員会の報告書が提出され、子どもたちを中心とする国民の身体改善への関心が高まった年でもあった。精神論への注目も、道德教育を宗教教育から切り離し、歴史と体育とを必修化して、国を愛し、それに身を捧げる国民を育成しようとする同時期の教育改革運動と連動している。つまり、英国では、日露戦争と軌を一にして、教育改革と身体改善運動とにより心身ともに愛国的な兵士の育成が求められていた。一九〇四年から帝国記念日運動を展開したミース卿は、国歌と国旗とを時に反発を買うほどあからさまな形で敬愛するよう働きかけたが、容易に想像できるように、日露戦争での日本の善戦は格好の範例として言及されることになった。

新渡戸の『武士道』は、元はといえば日清戦争での勝利を武器の性能に帰するような議論に対して、特にアメリカの読者を対象にして書かれていた。それを英国の文脈にあわせて紹介したのが、『タイムズ』紙のレピントンであった。彼は、その「国民の魂」で、武士道が日本の勝利の源であり、武士道が階級をこえて国民全体の道德となっていること、父祖と国を敬愛する武士道の教えはキリスト教とも矛盾せず、むしろ宗派をこえて統合できることを主張した。宗派と階級の相違をこえて、国民としての一体感を創成することは、ボーア戦後の英国で焦眉ともいえる課題であったため、このレピントンの記事によって、「武士道」という言葉は、以降、人口に膾炙することとなったのである。たしかに新渡戸の『武士道』あつてのレピントンの記事ではあるが、英国での流行に、レピントンによる英国固有の文脈への変換と流用があつたことは特記しておいていだろう。そして、レピントンが、当時、議論がかまびすしかった兵役を積極的に導入しようとしていたことも見逃すことはできない。こうした兵役導入論者にとって、日露戦争での日本兵の活躍は格好の事例として言及されたからである。

そうした規範としての日本へのまなざしを集約するのがヴィヴィアン・グレイによる『大英帝国衰亡史』である。これは百年後の日本で、滅び去った大英帝国の歴史をもって亀鑑とする国民学校の教科書という設定で記されている。国民の一体感と連続意識とを高めるために歴史が必修化されたことと、この警世のパンフレットは問題意識を共有しているといつてよい。ローマ帝国と大英帝国との衰退を二重写し

にするのはエドワード朝に盛んな風潮であったが、日本がスパルタのような質実剛健なギリシアになぞらえられたことと、同じ図式で考える必要があるだろう。

この『大英帝国衰亡史』の問題意識を実践に移し、ミース卿と同じ路線にたつて、青少年を動員することにもっとも成功したのがベーデン＝パウエルのボーイスカウト運動である。アップークラスかアップーミドルクラスの子弟たちの文化であり、ノブレス・オブリージュだったスポーツ、狩り、愛国心を、ベーデン＝パウエルは、ワーキングクラスを含めた少年たちに開放し、彼らの「改良」に身を砕いた。その理念が記された『スカウティング・フォア・ボーイズ』は、擬似的な父のもとで男同士の紐帯を強化すべく、父祖への敬愛と同時に、身体の鍛錬として柔術を薦め、現代の騎士道として武士道を参照している。しかし、こうした日本の存在は脅威と裏腹だったことは見逃してはならないだろう。日露戦争において、日本の文明化は称賛され、あるいは脅威として認知され、いわゆる列強入りを果たしたとはよくいわれる。しかし、その際に、もっともその文明化の成果を喧伝した英国において、日露戦争の勝因があたかも武士道か道徳心にあったかのような精神主義の風潮が生まれたのである。

そして、柔術や武士道への英国の熱狂は、後にインドという植民地の男たち、そして英国国内の婦人参政権運動家たちという、ベーデン＝パウエルが意図した男たちの共同体とはおよそ別のところで流用され、帝国の紐帯は次々に切り崩されることになる⁹⁸。婦人参政権運動家たちの抗議をかわすため、警官は人形で柔術の練習をしてはどうだろうと冗談として描かれた戯画（図7）から、早くも三年後の一九一〇年には、事態は逆転した形で実現することになった。上西に柔術を習ったイーディス・ガラッドが、警官の人形を使って、柔術で相手を投げ飛ばす模範演技を、婦人参政権運動家たちの大会で披露したのである⁹⁹。一九〇五年に執事を柔術で投げ飛ばしてしまう召使いの少年を描いたウォーリス・ミルズは、めざとくその一事をとらえ、ほほえみながら警官を投げ飛ばす「柔術使いの婦人参政権運動家」を『パンチ』に描いたのだった（図8）¹⁰⁰。

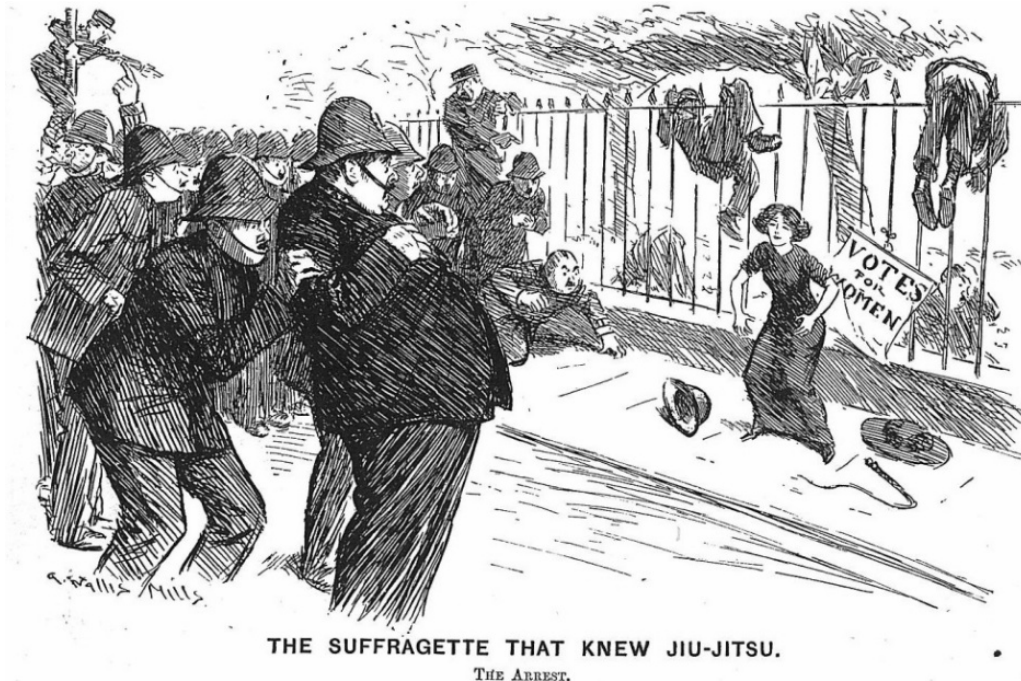


図 8

一方、日本でも、こうした柔術熱は逆輸入され、精神が物量に勝る好例としてとらえられるようになってゆく。ベルツが危惧したように、こうした英国での過大な日本評価と精神主義の賞賛は、「危険な自惚れ」と共振してアジア主義を刺激してゆくことになる。英国がその結果を思い知るのはしばらくしてのち、第一次世界大戦前夜のことであった。

- 1 本稿は、『近代世界における国民・ジェンダー規範の形成』（加藤千香子代表・科学研究費補助金報告書, 2010 所収の「日露戦争後の英国における武士道と柔術の流行」を大幅に改稿したものである。
- 2 G.K. Chesterton, *Autobiography* (London: Hutchinson, 1936), p.123. なお、チェスタトンにみられるような日本批判や黄禍論の世紀転換期の系譜については、Yorimitsu Hashimoto (ed.), *Yellow Peril, a Collection of Historical Sources* 4 vols (Tokyo: Edition Synapse, 2012)を参照。
- 3 G.R. Searle, *The Quest for National Efficiency: a Study in British Politics and Political Thought, 1899-1914* (Oxford: Blackwell, 1971), pp. 54-60.
- 4 ほかに、それまですでに紹介されていた「能」や「俳句」が、その簡素な形式のゆえに再評価されるのも、サールのいう「効率」化の文芸における一例とみなすことが可能だろう。この点については、橋本順光「失われた大陸を求めて 俳句と英詩とアトランティス」(英米文化学会編『アメリカ 1920 年代—ローリング・トゥエンティーズの光と影』金星堂、二〇〇四年)を参照。
- 5 トク・ベルツ編『ベルツの日記 下』菅沼竜太郎訳、岩波書店、一九七九年、二八〇頁。
- 6 トク・ベルツ編『ベルツの日記 下』、七九一八〇頁(一九〇四年五月二十四日)、一一七頁(一九〇四年七月三日)。
- 7 'The Wisdom of the East', *Punch*, March 16 1904.
- 8 橋本順光「ジャック・ロンドンと日露戦争—従軍記事から「比類なき侵略」(1910)へ」(日露戦争研究会編『日露戦争研究の新視点』成文社、二〇〇五年)を参照のこと。
- 9 トク・ベルツ編『ベルツの日記 下』、一七二頁(一九〇四年九月十四日)には、従軍も観戦もできずスパイ扱いされたことに憤慨する英国人記者もいたとあるものの、全体としては少数派であった。
- 10 トク・ベルツ編『ベルツの日記 下』、二八八頁(一九〇五年一月八日)。
- 11 *The Times*, February 11 1904.
- 12 *The Times*, January 3 1905.
- 13 *The Times*, June 2 1905.
- 14 *The Times*, May 12 1904.
- 15 *The Times*, January 7 1905.
- 16 この末松の論文は、松村正義『ポーツマスへの道 黄禍論とヨーロッパの末松謙澄』原書房、一九八七年、一六五—一九八頁に詳細に訳出され、紹介されている。
- 17 'Baron Suyematsu on the "Yellow Peril"', *The Times*, January 12 1905.
- 18 島村抱月『滞欧文談』春陽堂、一九〇六年、四四—一頁。以下、旧字旧かなルビについては読みやすくするため一部改めたところがある。
- 19 島村抱月『滞欧文談』四三二、四三四頁。
- 20 Inazo Nitobé, *Bushido: the Soul of Japan* (Philadelphia: Leeds & Biddle Co., 1900), p.124. 邦訳は矢内原忠雄訳が岩波書店から一九三八年以降、刊行され続けている。なお『武士道』の出版は、著作権を明記した箇所には一八九九年とあるが、刊行年にその旨を記した版は見つけられなかった。
- 21 'A Lesson in Patriotism', *Punch*, July 6 1904.
- 22 たとえば'The Attempt to Block Port Arthur: Admiral Togo's Report', *The Times*, March 31 1904 など。
- 23 桜井忠温『肉弾』英文新誌社、一九〇六年、一三頁。なお、『武士道』の普及版邦訳を一九〇八年に出版した桜井鷗村(彦一郎)は、忠温の兄である。
- 24 こうした英国における武士道の流行とその消長については、Yorimitsu Hashimoto, 'White Hope or Yellow Peril? : Bushido, Britain and the Raj' in David Wolff et al. (eds.), *World War Zero: The Russo-Japanese War in Global Perspective*, vol. II (Leiden, forthcoming) を参照。
- 25 JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C06040682900、大本営 日露戦役「明治 37 年自 6 月 13 日至 8 月 9 日 第 5 号 副臨号書類綴 大本営陸軍副官管」第 1、2、3 接伴掛 武士道送付の件(防衛省防衛研究所)。
- 26 橋本順光「ジャック・ロンドンと日露戦争—従軍記事から「比類なき侵略」(1910)へ」、二一八頁。
- 27 アジア歴史資料センター、Ref.B03040670000、「義和団事変後ニ於ケル外国新聞操縦関係雑纂附倫敦ニ於テ日本ノ利益ヲ代表スル雑誌刊行ノ議ニ付「アルフレッド、ステット」ヨリ申出ノ件」(外務省外交史料館)。こうした日本の広報戦争において、*Japan Weekly Mail* 紙の F. Brinkley が『タイムズ』紙に「日本武士道論」を寄稿して重要な役割を果たしたといわれることがあるが、該当する記事はない。ブリנקリーが日本政府のいわゆる御用新聞の主筆であったことと、レピントンの「国民の魂」がブリנקリーに言及していること、後年、チェンバレンの武士道批判(1912)にブリנקリーが反論したことなどから起きた誤解かと思われる。日本政府による *Japan Weekly Mail* 紙の懐柔については大谷正『近代日本の対外宣伝』(研文出版、

一九九四年) 六三—六四頁。チェンバレンとの武士道論争については楠家重敏『ネズミはまだ生きている—チェンバレンの伝記—』(雄松堂出版、一九八六年) 第十一章参照。

28 'A Soul of a Nation', *The Times* October 4 1904.

29 *The Times*, December 9, 1904.

30 Hashimoto, 'White Hope or Yellow Peril?', p.398.

31 たとえば「国民の魂」は「国民の士気」と訳されて保存されている。アジア歴史資料センター, Ref. A03023691800, 各種情報資料・タイムス日露戦争批評・「タイムスの日露戦争批評(百八) 国民の士気(三)」(国立公文書館)。

32 「武士道(倫敦タイムスを読む)」読売新聞一九〇四年十一月十七日、および「出征軍人へ書籍寄贈」一九〇五年五月二十八日。

33 Hashimoto, 'White Hope or Yellow Peril?', p.395. 一方、百年後の日本では、英国教育調査団編『サッチャー改革に学ぶ教育正常化への道 英国教育調査報告』(PHP 研究所、二〇〇五年) など、英国の教育政策が恣意的に参照されることになった。詳しくは橋本順光「国際理解教育とは何か(2):イギリスを事例に」横浜国立大学教育人間科学部紀要 I (教育科学)、十一、二〇〇六、五四—六〇頁を参照。

34 Searle, *The Quest for National Efficiency*, p.60; Searle, *A New England?: Peace and War 1886-1918* (Oxford: Clarendon Press, 2004), p.305.

35 Searle, *A New England?*, pp.375-6. 委員会の報告は、『タイムズ』紙でも詳細に報道されている。'Physical Deterioration: Report of the Committee' *The Times*, July 29 1904 を参照。

36 英国における柔術の移入と身体文化の関わりについては、木下誠「D・H・ロレンス『恋する女たち』における柔術と身体文化」(武藤浩史・樽沼範久編『運動+(反)成長』慶應義塾大学出版会、二〇〇三年) および坂上康博編著『海を渡った柔術と柔道—日本武道のダイナミズム』(青弓社、二〇一〇年) を参照。

37 島村抱月『滞欧文談』、四五九頁。

38 「柔術」が英語圏に広まったのは、『東の国から』(一八九五)所収のラフカディオ・ハーンによる一文「柔術」からであり、ハーンがそこで嘉納治五郎の柔道を柔術と記したことに始まる。そこでハーンは柔術の精神性を強調し、日清戦争は柔術によって勝利したのだと記したが、日露戦争期に、ハーンの「柔術」はほとんど参照も引用もされることがなく、もっぱら武士道が利用されることになった。詳しくは、橋本順光「ラフカディオ・ハーンの時事批評と黄禍論」(平川祐弘編著『講座 小泉八雲Ⅱ ハーンの文学空間』新曜社 二〇〇九年) 五四三—五五九頁を参照。

39 Apollo, *Jujitsu: What It Really Is* (London, n.d.), pp.19-20.

40 'Fiscal Jiu-jitsu', *Punch*, May 24 1905.

41 E.W.Barton-Wright, 'The New Art of Self-defence-How a Man May Defend Himself against Every Form of Attack', *Pearson's Magazine* (7) 1899, p.402.

42 サンボーンは、長く『パンチ』の顔となった挿絵画家だが、ほかにも自身で撮影した写真を流用して大量の作品を描いたことがわかっている。詳しくは Robin Simon (ed.), *Public Artist, Private Passions: The World of Edward Linley Sambourne* (London: The British Art Journal and The Royal Borough of Kensington and Chelsea, 2001) を参照。

43 シャーロック・ホームズにも登場する 'Bartitsu' については、Emelyne Godfrey, *Masculinity, Crime and Self-defence in Victorian Literature* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2011) が詳しい。

44 井野瀬久美恵『子どもたちの大英帝国』中央公論社、一九九二年、一三二—一三七頁。

45 こうした新渡戸の『武士道』にみる創られた伝統としての構築性については、宇野田尚哉「武士道論の成立—西洋と東洋のあいだ—」ペリかん社、『江戸の思想』第七号、一九九七年や、鈴木康史「明治期日本における武士道の創出」筑波大学体育科学系紀要第二四号、二〇〇一年ですでに指摘されている。

46 梅根悟監修『世界教育史大系 38 道徳教育史 I』講談社、一九七六年、一九八頁、井野瀬久美恵『子どもたちの大英帝国』中央公論社、一九九二年、一三一頁。

47 Nitobé, *Bushido*, preface, v.

48 'Cause and Effect', *The Times*, March 13 1905.

49 ほかに *The Times*, August 22 1905 など、おおむねネルソンを意識した英訳がなされている。

50 Lord Redesdale, *The Garter Mission to Japan* (London: Macmillan, 1906). 邦訳として A・B・ミットフォード『英国貴族の見た明治日本』長岡洋三訳、新人物往来社、一九八六年、あるいは改題再刊した『ミットフォード日本日記』があるが、老獪な外交官としての側面は十分に触れられていない。

51 君塚直隆「日露戦争と日英王室外交」(軍事史学会編『日露戦争(一)—国際的文脈—』錦正社、二〇〇四年) 一二〇—一二一頁。

52 Nitobé, *Bushido*, pp.76-80.

- 53 Redesdale, *The Garter Mission to Japan*, p.250. なお、自著を『武士道』で引用した新渡戸に返礼するかのよう、ミットフォードもまた『武士道』から茶道の記述を引用している。同書 pp.198-200 を参照。
- 54 Redesdale, *The Garter Mission to Japan*, p.64. 部下を助けに戻って爆死した広瀬武夫については同書 pp.248-249 で説明がある。
- 55 Redesdale, *The Garter Mission to Japan*, pp.64-65.
- 56 P・C・マッキントッシュ『近代イギリス体育史』加藤橋夫・田中鎮雄訳、ベースボール・マガジン社、一九七三年、一二一―一二四頁。
- 57 Redesdale, *The Garter Mission to Japan*, pp.162-163. ただしミットフォードは、旧時代の身分差別が本当に解消したのかと黒木為楨大将に質問したところ、「いっしょに食事をしようしない者もいるが、時がたてばそんなこともなくなるだろうと、考えているようだった」と記している。同書 p.161 参照。
- 58 大谷正『近代日本の対外宣伝』研文出版、一九九四年、三二―三三―三五頁。
- 59 'Japan and the Chinese Crisis', *The Times* July 12 1900.
- 60 E. Bruce Mitford, *Japan's Inheritance* (New York: Dodd, Mead & Co., 1914), pp.364-365. ミットフォードはまた、ドイツにおけるアーリア至上主義の理論的根拠となったことで有名なヒューストン・チェンバレンの『一九世紀の基礎』の英訳（一九一〇）に好意的な序文を寄せてもいる。そして奇しくも、彼の孫娘の一人ユニティは、ナチズムの熱烈な擁護者となり、唯一の孫息子トマスは共感するナチスドイツではなく、嫌悪する日本軍との戦いを志望し、旧ビルマで戦死することとなった。詳細は、メアリー・S・ラベル『ミットフォード家の娘たち』栗野真紀子・大城光子訳（講談社、二〇〇五年）を参照。
- 61 'The Yellow Peril', *New York Times* April 18 1905.
- 62 G. K. Chesterton, *The Collected Works of G. K. Chesterton*, Vol. 27 (San Francisco: Ignatius Press, 1986), p.269.
- 63 たとえば一九〇五年に限ってみても、縮緬と思しい'New Kimona Jacket'についての Draffen & Jarvie's の広告や、'Japanese Kimono Jacket'を紹介する Herbert & Sons の広告などが多く散見される。それぞれ *Evening Post*, April 10, 1905 及び *Gloucester Citizen*, June 14, 1905 を参照。
- 64 英国側の資料では確認できていないが、桜井鷗村（彦一郎）は一九〇八年に東郷と乃木の蟬人形を、田中涸人は一九〇九年に東郷のを、それぞれマダム・タッソーで見たと記している。桜井彦一郎『欧州見物』丁未出版社、一九〇九年、三三六頁、田中涸人『最新倫敦繁昌記』博文館、一九一〇年、九六頁。なお、このことは、和田博文ほか『言語都市・ロンドン』藤原書店、二〇〇九年、五一―八頁でも一部指摘されている。
- 65 ただキモノの流行は、ヴィクトリア朝的な身体観からの解放も手伝って武士道熱よりも長く続いた。桜井鷗村もロンドンでは「キモノ」あるいは「キモナ」が「上着ともなり、外套ともなり、これが近年引つづいての大流行」と述べ（『欧州見物』、二六三頁）、田中涸人も「所謂キモノはウエスト、エンドは勿論、市内の所々にて見本棚に飾れるを認む」（『最新倫敦繁昌記』、一二五頁）と指摘している。一方で、田中はロンドンの本屋にある日本物といえば、「大隈伯の開国五十年史が一番目に立ち肉弾は最早廢りて買手なく」ほか寥寥たる状態とも報告している。ちなみに桜井鷗村が大隈の命を受けて欧州を訪問したのは、この『開国五十年史(Fifty Years of New Japan, 1909)』の出版交渉のためであり、弟の『肉弾』を英訳した一人である本田増次郎ともロンドンで三年ぶりに再会している（『欧州見物』、三頁および九三頁）。
- 66 'Banzai!!', *Punch*, September 6 1905.
- 67 何事にも機を見るに敏なウェルズは三年後には、日独による世界戦争という『空中戦争』（一九〇八）を発表している。Hashimoto, 'White Hope or Yellow Peril?', p.394, pp.398-399.
- 68 その三歳馬「武士道」は、J・A・ロスチャイルド所有だった。もっとも、戦績はさしてよくなかったようである。たとえば *The Times*, April 23 1908 を参照。
- 69 平田諭治『教育勅語国際関係史の研究』風間書房、一九九七年、第四章第一節「日露戦争下の広報外交活動と教育勅語」を参照のこと。
- 70 William Awdry, 'The Character of the Japanese People,' *The Times*, October 2 1905.
- 71 Vivian Grey [Elliot Evans Mills], *The Decline and Fall of the British Empire ... Appointed for Use in the National School of Japan ... Tokio, 2005* (Oxford: Alden & Co.; London: Simpkin, Marshall, Hamilton, Kent & Co., 1905). なお、この『大英帝国衰亡史』の本文は、初版との異同を含めて、橋本順光「The Decline and Fall of the British Empire (1906)とその抄訳『英国衰亡論』(1906)の復刻及び解題」横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ（人文科学）、七、二〇〇五年、で復刻した。なお、以下の記述は、上記解題と一部重複するところがある。
- 72 Samuel Hynes, *The Edwardian Turn of Mind* (Princeton: Princeton University Press, 1968), pp.24-5.
- 73 Donald Read, *Edwardian England* (London: Harrap, 1972), p.150 と Norman Vance, *The Victorians and Ancient Rome* (Oxford: Blackwell, 1997), pp.234-5 および南川高志『海のかなたのローマ帝国』岩波書店、

二〇〇三年、三一頁がそれぞれ、エドワード朝においてローマ帝国が批判的に言及されたことを指摘し、その例として『大英帝国衰亡史』を挙げている。

- 74 Vivian Grey, *The Further Surprising Adventures of Lemuel Gulliver* (Oxford: Alden & Co., 1906), back matter. この演説はやや不正確ながら Hynes, *The Edwardian Turn of Mind*, p.26 でも引用がある。
- 75 Elleke Boehmer, Introduction in Robert Baden-Powell, *Scouting for Boys* (Oxford: Oxford University Press, 2004), xix および田中治彦『ボーイスカウト』中央公論社、一九九五年、二六頁。
- 76 こうした東洋の視点から英国を風刺した作品は十八世紀からあり、その系譜と変化については、橋本順光「中国人からの手紙：オリヴァー・ゴールドスミスの『世界市民』にみる中国」『英米文化』三十、二〇〇一年、および「Lang-Tung, *The Decline and Fall of the British Empire* (1881)の復刻及び解題」横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ(人文科学)八、二〇〇六年を参照。
- 77 Grey, *The Decline and Fall of the British Empire*, p.49.
- 78 Grey, *The Decline and Fall of the British Empire*, p.3.
- 79 チェインバース編『ローマ帝国の没落』弓削達訳、創文社、一九七三年、一九三頁。
- 80 Nitobé, *Bushido*, p.40.
- 81 Nitobé, *Bushido*, p.21.
- 82 十九世紀後半においても、生活の中に生きる簡素な美という近代文明との対比から、日本は古代ギリシアになぞらえられることがあった。谷田博幸『唯美主義とジャパニズム』名古屋大学出版会、二〇〇四年の第三章「古代ギリシアと日本—英国の〈日本趣味〉の一局面」を参照。
- 83 Grey, *The Decline and Fall of the British Empire*, p.10.
- 84 R. J. Q. Adams and Philip P. Poirer, *The Conscription Controversy in Great Britain, 1900-18* (Basingstoke: Macmillan Press, 1987), p.34.
- 85 田中治彦『少年団運動の成立と展開』九州大学出版会、一九九九年、二九頁。
- 86 Michael Rosenthal, 'Knights and Retainers: The Earliest Version of Baden-Powell's Boy Scout Scheme', *Journal of Contemporary History*, vol. 15 (1980), p. 605 および鈴木雄一「バーデン・パウエルの手紙」若獅子会会報、第一号、一九九七年、二八頁。両者はともに、バーデン＝パウエルの投書の全文を掲載している。なお後者の閲覧に際しては、スカウティング研究センター事務局の黒澤岳博氏より、格別のご厚意を賜った。記して謝したい。
- 87 'The War in the Far East', *The Times*, February 13, 1904.
- 88 Robert Baden-Powell, *Scouting for Boys*, edited with an introduction and notes by Elleke Boehmer (Oxford: Oxford University Press, 2004), p.212.
- 89 Baden-Powell, *Scouting for Boys*, p.216, p.226.
- 90 Pietro Micca については、ベデカーのイタリア案内記に記載されていたこともあり、英国でもよく知られていた。日本でも松岡寿が「ピエトロ・ミカの服装の男」(1881)という肖像画を残している。
- 91 Baden-Powell, *Rovering to Success* (London: Jenkins, 1930), p.91.
- 92 この書簡は、E.E. Reynolds, *Scout Movement* (London: Oxford University Press, 1950), pp.9-13 に全文が掲載されている。
- 93 Baden-Powell, *Scouting for Boys*, p.295.
- 94 Baden-Powell, *Scouting for Boys*, p.278.
- 95 Baden-Powell, *Scouting for Boys*, pp.277-8, p.216, p.226, pp.197-8, pp.188-9 など。
- 96 Yorimitsu Hashimoto, 'Soft Power of the Soft Art: Jiu-jitsu in the British Empire of the Early 20th Century', in Shigemi Inaga (ed.), *The 38th International Research Symposium: Questioning Oriental Aesthetics and Thinking: Conflicting Visions of 'Asia' under the Colonial Empires* (Kyoto: International Research Center for Japanese Studies, 2011), pp.69-80.
- 97 Baden-Powell, *Scouting for Boys*, p.289.
- 98 こうした経緯の概観については、Hashimoto, 'Soft Power of the Soft Art'を参照。また橋本順光「黄禍論とジェンダー—柔弱から柔術へ」(加藤千香子編『ジェンダー史叢書五 暴力と戦争』明石書店 二〇〇九年)二〇一—二〇三頁でも簡単に触れている。
- 99 Hashimoto, 'Soft Power of the Soft Art', p.77.
- 100 'The Suffragette That Knew Jiu-jitsu', *Punch*, July 6 1910.